

研究ノート：遊廓と祈り

～久留米市・桜町遊廓における娼妓の生活と信仰～

Study on the faith around the prostitute and the red light-district in early modern Kurume

平 川 知 佳

Chika HIRAKAWA

はじめに

1. 研究動機と目的

久留米市に桜町遊廓が誕生したのは、明治期である。明治時代になり「娼妓解放令」が発せられ、娼妓として働くための前借金制度が人身売買に相当するということで、娼妓として身売りの禁止がすすめられた。しかしながら「娼妓解放」とは名ばかりで、娼妓たちは、本当の意味では解放されなかった。人身売買は禁止となったが、遊廓そのものが禁止されることにはならなかった。それどころか、日本各地に遊廓づくりがすすめられていく。そのうちの 하나가、久留米市桜町遊廓である。

「娼妓解放令」では、それまでの楼主を「貸座敷営業者」と位置づけ、娼妓は楼主より座敷を借りて売春を行う存在であり、あくまでも娼妓と楼主の関係は座敷賃借の契約関係で、娼妓は自由意志という建前で売春営業を行うという形がとられた。とはいえ、実際には娼妓と楼主の関係はそれまでと同様、対等とは言えなかった。彼女たちは、男性から選ばれ、買われる立場であったため、男性と対等な関係ではなかったこと、また不特定の男性に性を売る仕事そのもののイメージから、蔑まれることも多かったとされる。

そんな彼女たちの暮らしはどのようなものだったのか。筆者は、久留米市の桜町遊廓における娼妓をめぐる金銭のやりとりが記された唯一の資料、『娼妓所得金日記帳』¹（久留米市教育委員会蔵）を考察した拙稿において、娼妓の生活の一端を明らかにした²が、そこには「彼女たちがどのような思いで生活していたのか」という課題が残った。『娼妓所得金日記帳』からは、毎日のように客をとらされる生活、それでも借金がどんどん嵩んでいく過程をみることができる。そこからは彼女たちの暮らしがとても厳しい生活であったことは言うまでもないが、それでも彼女たちはそういった生活を何年も続けなければならなかった現実も浮かんでくる。そこで、その厳しい生活の中で彼女たちはどのように自分を奮い立たせていたのだろうか、ということに眼を向けてみたいと思った。

そこで注目したのが「信仰」である。もとより吉原をはじめとする遊廓の文化においては縁起の善し悪

¹ 久留米市桜町遊廓の福寿楼で働いていた娼妓の金銭記録帳。時代は大正初期～昭和初期。

² 拙稿「近代久留米における遊廓の成立背景と展開～『娼妓所得金日記帳』にみる娼妓の生活～」(西南学院大学大学院研究論集第3号、2016年7月)

しなども非常に大切にされていたし、まじないなどでその日の客の入り占うこともあった。また、後に詳しく述べるが、遊廓の中に稲荷神社が存在していたり、妓楼の中にも「金精神」が祀られている例がある。また明治期の『福岡日日新聞』³の記事からも、久留米市の桜町遊廓で働いていた娼妓が神社に参詣に行く様子を読みとることができる⁴。これらのことから言えることは、「信仰」が娼妓の生活の非常に身近なところにあったのではないか、ということである。

では一体彼女たちは、そこで何を祈っていたのか。彼女たちの祈りの内容へ眼を向けることで、彼女たちが何に悩み、何に苦しんでいたのか、そして何を願っていたのかということを考えることができないであろうか。本稿の目的は、彼女たちの信仰の内容から、今はもう知ることができない彼女たちの生活実態を推察しようという試みである。

2. 本論の方向性

遊廓および娼妓と信仰のみに焦点をあて考察を行った研究はこれまでなされておらず、娼妓が社寺で実際にどういった内容の祈りを捧げていたのかについて詳しく知ることは難しい。娼妓たちが何に対して祈っていたのかその対象について調べることで、どういったことを願っていたのかが見えてくるのではないだろうか。そこでまずは娼妓が身近に通うことができたと思われる遊廓内および遊廓付近に位置していた社寺の由来、ご利益等を調べることにする。もっとも、娼妓が信仰していたとされるのは、遊廓内あるいはその付近の社寺だけに限らないだろう。『福岡日日新聞』によると、桜町遊廓の娼妓も遊廓外の稲荷神社まで参詣に出かけている⁵。

どの社寺に娼妓が通っていたのかを全て調べるのは膨大な作業となってしまうので、今回は、各地における性の神、性に関する奉納物の伝承等に注目し、娼妓との関係について焦点をあてることにする。遊廓またそこで働く娼妓の仕事は、その機能上「性」と直接結びついているため、何かしらの関係があると思われるからである。

そこで、全国の性にまつわる信仰を集めた文献を参照してみると、その中に娼妓が通ったとされる神社等の記述がいくつか見受けられる。それらを材料に、由来およびご利益等を調べ、何がみえてくるか考察を行うことで、娼妓がどういったことを願っていたのか、考えてみたい。そして、それらを合わせた上で久留米市における遊廓と神社あるいは娼妓と信仰の関係、およびその特性を明らかにすることで、桜町遊廓における娼妓の生活の一端を浮かび上がらせることができればと考える。

1. 遊廓と信仰

(1) 吉原における娼妓と信仰

遊廓と社寺の関係は深い。まず有名なのが、江戸の吉原遊廓における神社である。吉原には、九郎助稲荷という神社があった。九郎助稲荷は、吉原が開設されるときに鎮守の神として勧進された神社で、1657(明暦3)年の遊廓移転にともない、新吉原へうつされた。九郎助稲荷は、明治時代になって、廓内に散在していた玄德稲荷、榎本稲荷、開運稲荷、明石稲荷ともに合祀され、吉原神社となった。この吉原神社は、大門へ入る右手に存在していたが、関東大震災で焼失した。その後移設され現在の場所にある。

ここで注目したいのは、吉原が開設されるときに設置されたという点である。九郎助稲荷は、『柳花通

³ 『福岡日日新聞』(福岡日日新聞社)

⁴ 『福岡日日新聞』(1898(明治31)年4月付)詳しくは、本論第3章に記載。

⁵ 同上

誌』⁶において「正一位黒助稲荷大明神と崇め奉る、今は吉原にて縁結びの神といふ。毎年八月朔日より祭式行れて、ねり物俄等を出して見物山をなす。月々午の日には参詣多し」と描かれている⁷。この九郎助稲荷の祭礼で出された「ねり物俄等」は、吉原三大形容の一つとされる「吉原俄」というイベントの始まりである。

また、『吉原大全』⁸にも、初午の日における九郎助稲荷の景況が「此夜江戸町一丁目二丁目、京町、新町の通りの中へ、家々の女郎の名を書きつけたる大桃灯をともし事おびただし、是はいなりへの奉納の為なり。九郎助いなりその他江戸町、伏見町、京町、松田いなりなどのやしろへ、客女郎打まじり、さんけい、はなはだ、くんじゅす」といったように描かれている。

その一方で、『春色梅美婦禰』⁹には、娼妓が一人でお百度参り¹⁰をしている様子が描かれている¹¹。そこには、行灯や提灯また背景に夜空が描かれていることから、娼妓がお参りしているのは、夜であることがわかる¹²。このことから、娼妓が一人でひっそりとお参りしていることが読みとれる。お百度参りは人に見られないように行うことで効果があるともされており、そのために夜に一人で参詣しているのであろうが、ここから遊廓内の神社が、娼妓たちにとって切実な願いを捧げる場所として認知され、機能していたということが言えるかもしれない。ここから、稲荷への参詣が行事として取り入れられている様子のほかに、行事とは関係なく、娼妓がひっそりと参詣していたという、娼妓の日常も読みとることができる。

また、吉原の遊廓内の妓楼における風習に、金精神を祀ることがあった。金精神とは、次章でも取り上げることとなるが、男根を神にみたくて祀った神の一柱である。いわゆる男根奉納物であるが「金精神」や「金勢神」、「金勢様」のほか、さまざまな呼ばれ方をされる。妓楼の神棚や縁起棚に金精神を祀るという風習については、『嬉遊笑覧』¹³に「今娼家にて男根の形を作り、神として祭るはよしありと覚ゆ。しかれどもいと近き習俗と見えたり。…明和安永の頃までも、妓家にこれを祭れることなかりしなるべし」と記されている¹⁴。このことから、この風習は、天明時代以後に行われた風習であることがわかる。このほか、『川柳吉原風俗絵図』¹⁵によると、商売屋において金精神を祀ることは、商売繁昌の意味を込めて、縁起をかつぐことに重きがおかれていたことがわかる。妓楼では、張見世¹⁶の時刻になると、金精神の祀られた神棚へ燈明を上げて、そこで働く娼妓たちが神前に一礼し、それから見世に並んだという。

遊廓における信仰は、吉原遊廓における神社を例に考えてみると、遊廓開設と同時に鎮守の目的で設置され、そこで吉原俄や初午の奉納など、イベントが行われることによって、存在が意味付けられていったことがわかる。その一方で、『春色梅美婦禰』にみられる娼妓が一人でひっそりと参詣する姿からは、そういった大掛かりなイベントの場としてだけでなく、娼妓の祈りの場として必要とされていたことがわかる。

⁶ 江戸後期の風俗書。

⁷ 「九郎助稲荷」三谷一馬『江戸吉原図聚』（中央公論社、1992年）より

⁸ 醉郷散人『吉原大全』、明和5（1768）年

⁹ 歌川国直画、天保12（1841）年

¹⁰ 民間信仰の1つ。神仏に祈願するために同じ社寺に百度参拝すること。一度ではなく何度も参拝することで心願が成就するように願ったもの。

¹¹ 「九郎助稲荷」『江戸吉原図聚』より

¹² 同上

¹³ 喜多村信節が江戸時代後期の風俗習慣、歌舞音曲などについて書いた随筆。天保元（1830）年発刊。江戸風俗を知る有益な資料として知られている。

¹⁴ 佐藤要人『川柳吉原風俗絵図』（至文堂、1973年）参照

¹⁵ 同上

¹⁶ 遊廓において娼妓が往来に面した店先に居並び、格子の内側から自分の姿を見せて客を待つこと。

(2) 各地における遊廓と社寺

ここまでは主に吉原遊廓に焦点をあて、遊廓内にあった神社や、妓楼の中での信仰についてみてきた。しかし、遊廓内に神社等があったのはもちろん吉原に限ったことではない。例を挙げるとすれば、吉原同様、日本における三大遊廓の一つとされる京都・島原遊廓の鎮守社であった島原住吉神社がある（図1参照）。

もともとは島原の地に住んでいた住吉屋太兵衛という人物の自宅に祀られていたが、良縁のご利益があるとして評判が高まり、享保17（1732）年に遷座し、島原住吉神社となった。島原遊廓の一角にあるため、島原遊廓で働く娼妓たちによって信仰されていたとされる。また神社で行われる例祭には、娼妓や芸妓に



図1. (上) 島原住吉神社（京都府京都市下京区）。(下左) 鳥居の足の裏側。「廓内発起人」の文字。
(下右) 玉垣の一部。「敷島楼」の文字。平成29（2017）年1月2日筆者撮影

よる練り物が行われた。鳥居の足の裏側には「廓内発起人」の文字が刻まれており、この神社の鳥居が、島原遊廓内の妓楼の経営者をはじめとする人々によって建立されたであろうことがわかる¹⁷。また神社を取り囲む玉垣の一部には、「敷島楼」という文字を確認することができる¹⁸。それは、島原遊廓内にあった一つの妓楼であると考えられる。このことから、島原住吉神社が、島原遊廓内で働く人々によって必要とされ、信仰を集めていたということが言える。

吉原遊廓のあった江戸（東京）に再度目を向けてみると、吉原のほかにも遊廓のような場所として、私娼街も多く存在していた。例えばかつて東京都向島区寺島町に存在していた玉の井という「まち」は、永井荷風の小説『墨東綺譚』の舞台となり、戦前から戦後の売春防止法施行まで栄えた私娼街（銘酒屋街）として知られているが、『玉の井 色街の社会と暮らし』の著者によって再現されたかつての住宅地図をみると、その地区の一角に社寺を確認することができる¹⁹。また同書によると、そのうちの啓運閣は、主に銘酒屋の経営者によって信仰されていたことがわかる。また東清寺の玉垣にも、経営者の名前が記載されているといい、経営者たちが寄進していたことがわかる。

そのほか玉の井関連の社寺については、娼妓が参詣していたことは記録に残っていないようであるが、立地からいっても、また経営者が熱心に信仰していたことから、そこで働く娼妓たちもそこを訪れていたことは、十分に考えられ、ここでも、娼妓と社寺の関係をみることができる。

ここで言いたいことは、吉原や島原のような古くからの歴史をもつ公認遊廓だけでなく、玉の井のような、歴史的には比較的新しくつくられたとされる私娼街においても、信仰の場が存在し、必要とされていた、ということである。同じ私娼街でいえば、同じく大正期につくられたとされる横須賀市安浦の私娼街の一角にも安浦神社という神社が存在している。安浦神社の玉垣には、東清寺の石堀と同じように、銘酒屋と思われる店名ほか経営者の名前が記されている（図2参照）。



図2. 安浦神社（神奈川県横須賀市安浦町）の玉垣。「菊の家」「岡本」「亀の家」「蜻蛉」など銘酒屋の店名だと思われる。平成27（2015）年12月8日筆者撮影

¹⁷ 図1（下左）参照

¹⁸ 図1（下右）参照

¹⁹ 日比恆明『玉の井 色街の社会と暮らし』（自由国民社、2010年）

(3) フィールドワーク調査より

遊廓と社寺の関係について、より具体的にイメージをするために、実際に遊廓のあった場所を訪れてみた。

平成28(2016)年10月16日に訪れた吉原遊廓跡の吉原という地名は、昭和41年(1966)年に地図上からは消え、現在は台東区千束となっている。ただし、地図上からは消えたものの、現在も、そのあたりの風俗店街一帯は一般的に吉原と呼ばれている。かつて吉原への入り口には、治安維持目的だけでなく、遊女たちの逃亡を防ぐため、苦界と娑婆を仕切る唯一の出入口として、吉原大門という立派な門が立っていた。しかしそれは大正期にはすでに姿を消していたようで、現在は、その交差点に「吉原大門」という名前が残されているのみである。大門のあったところで当時を思わせるものといえば、そのすぐそばに「見返り柳」がただ頼りなげに立っているだけであった²⁰。

大門のあった場所から、かつての廓内に入り、風俗店を横目に仲之町通りをすすんでいくと、吉原神社はある。それは、大門に対し存在していた裏門近くに位置している。吉原神社は明治5(1872)年に5つの稲荷社が合祀されて造られ、もともとは、そのうちの1つであった玄德稲荷神社の旧地に存在していたが、関東大震災にて焼失し、昭和9(1934)年から現在の地に祀られている。

吉原神社の現在の社殿は昭和43(1968)年に再建されている。吉原神社は5つの稲荷社が合祀されて造られたと先に述べたが、社殿の軒先には、それぞれの社の名前が書かれた提灯が飾られている(図3参照)。

吉原神社から徒歩1分の飛び地には、吉原弁財天がある(図4参照)。吉原弁財天は、開運、財運、芸能上達などの恵みを与える神様で、吉原で遊廓のあった時代から、働く娼妓たちの信仰を集めていたとされ



図3. 吉原神社(東京都台東区)平成28(2016)年10月16日筆者撮影

²⁰ 現在の見返り柳は、のちに移植されたものである。



図4. 吉原弁財天（東京都台東区）2016（平成28）年10月16日筆者撮影

る²¹。昔は大きな弁天池があり、その中洲に祠があった。今は池も埋め立てられ、祠の位置も変わっている。現在の祠の前には、関東大震災で、廓の外に出られずに逃げ場を失い、その池で溺死してしまった500人もの娼妓たちの霊を慰めるために祀られた観音像が立っている。そのほか、敷地内の灯籠などに妓楼の名前が残っており、遊廓経営者たちによって寄進されたことがわかることから、娼妓だけでなく、経営者たちの信仰を集めていたことも見てとれる。

観音像には、現在も花や線香がお供えされており、亡くなった娼妓たちへの慰霊がなされているのがわかる。何かを願う場所というよりも、吉原遊廓の娼妓の悲しい運命について考えさせられる場所として存在している向きがあるように思える。ここからは、時代が変化するにつれ、信仰の対象、あり方も変わって行く様子がみてとれるのではないだろうか。

（4）まとめ

遊廓設置の時代背景、歴史、内容にかかわらず、その一角ないしはそのすぐ付近に、社寺は存在していた。中には玉の井のように、遊廓のような場所がつくられる以前にその付近に社寺が存在し、その後、経営者や娼妓の信仰を集めることになったものもあるが、遊廓の敷地内の一角につくられた社寺については、吉原や島原の例のように、遊廓設置とともにつくられたということが言え、そのケースが多いのではないかと推察することができる。

もっともこのことについてより深く考察を深めるには、全国各地に存在した遊廓内の構成についての情報を集めるしかない。遊廓内の様子を知りそこに社寺があるかどうか、どういったものが祀られていたのか等を知ることができれば、娼妓と社寺の関係をさらに知ることができると思うので、それについては今後の課題としたい。

²¹ 吉原神社ホームページより

2. 性にまつわる神および性器形態神にみる娼妓と信仰

(1) 『図説性の神々』および『道祖神と性器形態神』にみる娼妓と信仰

性にまつわる信仰は、全国各地に存在する。『図説性の神々』²²の「日本民間性神祠の都道府県別一覧表」には、各地に存在していた性にまつわる神、性器形態神および性器形態奉納物にかかわるデータが県別にまとめられている。また『道祖神と性器形態神』²³は、性器形態奉納物と道祖神信仰との結びつきについて書かれたものであるが、その中の「性器形態神をめぐる神と人」で、各地に残されている性器形態神の神名、神体、奉納物、機能、伝承の関係が整理されている。

性信仰は、主として、農作物の豊穰や子宝祈願、また性病の治癒などの祈願のため行われてきた。それらの資料を合わせてみると、各地の性器形態奉納物、あるいは性をまつる神社などに、娼妓の信仰を集めていたものもいくつか存在していることがわかる。それらには、遊廓付近に立地するもの、あるいは遊廓の中ではなく、遊廓とは違う場所に存在し、そこに、娼妓が通っていた事例もある。

ここでは、それらを取り上げ別の参考文献で補強しつつ、整理することで、どういったことが見えてくるかについて考えたい。

性にまつわる信仰の1つとして挙げられるのが、第1章でも紹介した、金精神である。金精神とは、男根を神にみだて祀った神の一柱である。いわゆる男根奉納物であるが「金精様」、「金勢様」のほか、さまざまな呼ばれ方をされる。

岩手県には金精神すなわち男根奉納物が祀られている場所がたくさんあるが、それらのほとんどは「金勢様」と呼ばれている。「奥州南部の金勢様」によると、北上市のある稲荷社にも「金勢様」が祀られていたという話がある²⁴。その稲荷社はもともと遊廓のあった土地に存在していて、そこで働いていた女たちが、男根型造形物をつくって奉納したものだだったという。その稲荷社は土地とともに売られ、別の場所に移動させられており、その中で「金勢様」もなくなってしまっているため、娼妓と信仰を結びつける手がかりは、伝承の中以外では、見つけることができない。

青森県の三戸郡五戸町愛宕にも「金勢様」が祀られていたという伝承が残されている。「青森県における生殖器崇拜資料」²⁵によると、愛宕は、遊廓があった場所とされており、その「金勢様」は遊廓付近の小山の中に存在し、「長さ三尺二寸、周囲九寸二分」もの巨大な神体だったという。それはもともと近所の畑から掘り起こされたものだだったというが、遊廓が近いという場所柄、おそらくそこで働いていた女性の祈願者が多かったとされる。現在その神体の所在は不明になっている²⁶。

同じ青森県の八戸市小中野にも遊廓が存在していた。そのまちの一角に娼妓たちが競うように男根型造形物を奉納するお堂があったという。しかしそのお堂は火災により焼失し、唯一焼け残った石製の男根が小中野のJ寺に残されているのみである。そのほか、小中野のまちには唯一当時の姿を保ったまま営業を続けている旧妓楼「新むつ旅館」の中に、木製男根が祀られている。「新むつ旅館」が新陸楼として営業していた当時より祀られており、長さ20センチで金色に塗られた型など計6本存在しているという。現在も旅館内の神棚の左隅にひそかに祀られている²⁷。

山形県の鶴岡市（旧西田川郡）温海温泉付近にも昔遊廓が存在し、そのまちの熊野神社でも、男根奉納

²² 西岡秀雄『図説性の神々』（実業之日本社、1961年）

²³ 倉石忠彦『道祖神と性器形態神』（岩田書院、2013年）

²⁴ 浅野明「奥州南部の金勢様」『あしな 144号』（1974年）より

²⁵ 増田公寧「青森県における生殖器崇拜資料」『青森県立郷土館研究紀要 第36号』（2012年3月）より

²⁶ 2008（平成20）年9月時

²⁷ 2006（平成18）年8月時

物を祀る行事が行われていた。「二かかえもある陰根を木でつくり、これを車の上に立て、町の芸者や娼妓連がひいて歩い」たとされる²⁸。正月15日には特に賑わったとされるが現在では全く廃れている²⁹。

新潟県三条市の月岡にも、「木製の高さ四尺くらいの男根が十数本まつてある」場所があり、花柳界の信仰者が多かったとされている³⁰。三条市にも遊廓が存在していたので、娼妓たちも通ったと考えられる。石川県金沢市の卯辰山にも「男形の大石」が立っていて、芸者や娼妓の信仰を受けていたと言われている。おそらく金沢市内の遊廓の女性たちが信仰していたのであろう。

奈良県葛城市当麻地区（旧北葛城郡当麻町）にある当麻寺には、陰陽和合地蔵があり、そこに大阪の松島遊廓や新町などの講中の名を記した額が多数納められていたという。大阪で働いていた娼妓たちが講をつくって奈良まで参拝に来ていたということがわかる。大阪府大阪市天王寺区の天王寺愛染明王は、愛欲や欲望などの煩惱を悟りにかえて菩提心まで導いてくれるとされる仏様で、愛嬌開運などのご利益があるとされている。そのため、近辺に存在した遊廓の娼妓が参拝に訪れたと言われている³¹。京都府宇治市の県神社も、「愛嬌の守護神」が祀られているとされ、花柳界の信者が多かったという。

（2）『岡山の性信仰集成』にみる娼妓と信仰

『岡山の性信仰集成』³²は、岡山県内における性にまつわる社寺および神体や性器形態奉納物についての詳細な調査報告で、岡山県という一地域に限定されてはいるが、古代から現代においての性信仰の種類や特徴を知ることができる貴重な資料である。ここからは、この『岡山の性信仰集成』から娼妓と信仰にかかわる記述を取り上げていく。

岡山市北区吉備津には宮内遊廓が存在していた。宮内は、吉備津神社前の門前町として栄え、旅籠や料亭が軒を並べるようになり、遊廓のような場所がつくられた。その遊廓から100メートルほど離れた田圃の中に、淡島大明神が祀られていたとされる³³。淡島大明神は女の神で、女性の下半身の病気時には、この神にお願いすればよいとされている。そのため宮内遊廓が賑わっていた当時は遊廓で働く娼妓のお参りが多かったとされる。

また岡山県総社市の備中国分寺は真言宗の寺院であるが、聖天が祀られていたという。「国分寺聖天の大きな特色は、靈驗に「男女の和合」という点を明確に打ち出して」いるといい、戦前には、花柳界の人々、特に岡山市の中島遊廓、倉敷市川西町の遊廓関係の人々が多かったとされる³⁴。またここで注目したい点はそのような遊廓には国分寺聖天の講社³⁵がつくられたということである。津山市の徳盛神社には、「お花善神社」という小社がある。「お花」という女性が祀られ、女性の守り神として知られており、花柳界の女性が参詣していたという。性病治癒や悪縁を断ち切るとご利益があるとされていた。新見市にあった金精神社には、淡島神社が合祀されており、婦人病にご利益があると、ここも花柳界の女性たちが多く参拝していたと言われている。また全快すると布でつくった乳房や婦人の髪、また七色の布を備える風習があったとされる。

²⁸ 『図説性の神々』より

²⁹ 『図説性の神々』が書かれた時点で廃れてしまっている。

³⁰ 『図説性の神々』より

³¹ 「かつては勝曼遊廓の女郎が参拝し」と記述があるが、「勝曼遊廓」の存在については確認できない。

³² 岡山県性信仰集成編集委員会編『岡山県性信仰集成』（岡山人俗学会、1964年）

³³ 小祠と鳥居だけが残っているという記述。女性の髪がたばねて置いてあったという。

³⁴ 『岡山の性信仰集成』より

³⁵ 同一の社寺に詣でる講の団体。

(3) まとめ

(1)、(2) で記述してきたことをまとめてみると、いくつかのケースに分けられることがわかる。

1) 金精神 (男根奉納物)

岩手県北上市の稲荷社、青森県三戸郡五戸町愛宕遊廓近くの小山、八戸市小中野遊廓のお堂、旧新陸楼の神棚、山形県鶴岡市の熊野神社、新潟県三条市月岡、石川県金沢市の卯辰山

2) 愛染明王など「愛嬌の神」

大阪府大阪市天王寺区の天王寺、京都府宇治市の県神社

3) 淡島大明神

岡山市北区吉備津、岡山県新見市

4) 聖天

岡山県総社市の備中国分寺

5) その他

奈良県葛城市当麻地区 (陰陽和合地藏)、岡山県津山市の徳盛神社 (お花善神社)

以上のように、娼妓の信仰に関するものを整理すると、その対象を、まず金精神 (男根奉納物)、愛染明王、淡島大明神、聖天、そしてその他に分けることができる。

1) の金精神信仰は、いわゆる生殖器崇拜で、男性の生殖器を象徴として、農作物の豊穰や子宝、多産などをもたらす力があるものとして、信仰されている。それに関連して、性病治癒のご利益も言われる。また豊穰が生産に結びつくことから、第1章において紹介したように、商売繁昌のご利益もあるとされている。娼妓が参拝していたとするならば、性病治癒や商売繁昌を願ったものとされる。特に妓楼の中に設置された金精神は商売繁昌、また、遊廓付近のお堂に祀られた金精神には、経営者よりも、性病治癒の願いを叶えるため、娼妓が多く通ったのではないかと考えられる。

2) の愛染明王は、愛嬌開運のご利益があった。娼妓たちの商売においては、客を呼び寄せるために、ある程度の愛嬌が備わっていなければならなかった。客には一度だけでなく、二度三度と通ってもらう必要があったためである。また大阪府大阪市天王寺区の天王寺愛染堂の参道門や参道などには、会社名や個人の名前が記載された提灯が掲げられている。信者が愛嬌開運、商売繁昌などを願って提灯を奉納する献灯は、江戸時代からの歴史があるとされる。中でも、江戸時代の商人、芸能人や娼妓たちは、自分たちの名前をアピールする宣伝を兼ねてこの献灯を行ったと言われている³⁶。娼妓たちもこぞって献灯を行っていたとするならば、この献灯という行為からは、彼女たちの自分の仕事に対するプライドや強い意志を読みとることができるのではないだろうか。

3) の淡島大明神は、和歌山県和歌山市にある淡島神社を総本社とする祭神で、全国に淡島神社や粟島神社など、淡島神を祀った神社が多く存在している。主に婦人病の治癒、安産や子授け、また裁縫の上達など女性の生活にまつわるさまざまなことにご利益のある神とされている。そのため、娼妓たちが悩まされていたと思われる性病の治癒祈願のためだけではなく、女性を守る神であるということからも、娼妓たちの信仰を集めていたと思われる。淡島信仰について書かれた論文「淡島信仰に介在する宗教者」の中の「色街と淡島神社」という項にも、淡島神社が遊廓に隣接して立地している場合が多いこと、あるいは直接遊廓をはじめとする歓楽街に立地していない淡島神社においても大半の神社で娼妓や芸者の参詣が顕著であったことが書かれている³⁷。

³⁶ 天王寺愛染堂ホームページより

³⁷ 菅原千華『淡島信仰に介在する宗教者—福岡県内を中心に足跡をたどる—』(「研究報告」編集委員会編『旅の文化研究所研究報告』(旅の文化研究所、2002年))

4) 聖天は、歡喜天とも呼ばれる。仏教の守護神である天部の1つで、男天と女天が向き合って抱擁する形像から夫婦和合の功德があるとされるのである。娼妓の仕事は、男性と一夜の夫婦関係を結ぶようなものであったことから、娼妓にとって、夫婦和合のご利益を求める意味があったのかもしれない。

ちなみに聖天の紋章とされるものは大根紋で、とくに東京都台東区浅草にある待乳山聖天は、境内各所に大根と巾着のモチーフが表されていることで知られる。大根は良縁を成就し、夫婦和合の功德、巾着は、財宝で商売繁昌のご利益を表現しているとされる。また二股大根は、女性の表象として認識され、豊穡をイメージさせることから、農家や商家などで、縁起物として、神棚に飾ったりされていたこともわかっている³⁸。遊廓内で聖天の講中をつくっていたこと、また遊廓の文化が縁起をかつぐことを大切にしていたことなどからも、妓楼の神棚などにも二股大根などの縁起物が飾られることもあったのではないかと考えられる。実際に、福岡県久留米市に隣接する小郡市に存在していた遊廓の店先に、二股大根が飾られていたという話を聞いたことがある³⁹。

5) 娼妓たちは、人々によく認識されているような性神や女性の神である淡島神が祀られた神社だけではなく、例えば「お花善神社」のような地元根ざした神社にも、そこに意味を見だしご利益を求め、参詣していたことがわかる。

以上のことから、娼妓たちが願っていたのは、主に、商売繁昌、性病治癒、愛嬌開運、夫婦和合へのご利益が挙げられる。すべてが、仕事を円滑にすすめる上での願いのようにも感じられる。もっとも、それはどこか「表向き」の願いのようにも思われる。娼妓としてでなく、一人の女性として何かに願いをかけるとしたなら、彼女たちは何を願っただろうかということも考えずにはいられない。

3. 久留米市における遊廓と娼妓の祈り

(1) 久留米市桜町遊廓における娼妓の生活

桜町遊廓は、明治30(1897)年7月27日、久留米市原古賀町にて開業した。この桜町遊廓の設置および開業は久留米市における軍隊の設置とほぼ同時期で、桜町遊廓は、軍都としてのあゆみと連動するように、明治32(1899)年には妓楼数12軒、娼妓数94名、大正3(1914)年には妓楼数21戸、娼妓数248名と規模を大きくし、繁栄を極めていく。

『娼妓所得金日記帳』は、桜町遊廓の福寿楼で働いていた娼妓の金銭記録であるが、この『日記帳』(以下、『日記帳』と略す)は、大正初期から昭和初期までのもので、それぞれの時代に所属していた、10代から30代までの娼妓21名の金銭記録を見ることができる。そこには、1冊につき娼妓1人の1日の稼ぎ高、それを合計した1ヶ月の稼ぎ高総計金が計算されている。また稼ぎ高総計金から食費や利子などが引かれる様子も記されている。

娼妓のうちの1人、「小菊」のケースを取り上げる。「小菊」は、大正8(1919)年12月、23歳のときに前借金1600円で、福寿楼にやってきた娼妓である。『日記帳』の大正8(1919)年12月の記録を見てみると、12月12日に初床、それからほぼ毎日客をとっていることがわかる。揚げ代は4円50銭で、12月は18日間働いており、1日2人の相手をしている日もあるので、売り上げは、92円70銭となっている。しかしながらこの売り上げ金(稼ぎ高総計金)の半分は経営者に渡す決まりとなっていたようで、手元に残るのは46円35銭である。そして、ここから食料、利子などが引かれる。そのため、娼妓の自由になるお金はほとんどなかったように思われる。それどころか、このように売り上げの半分以上を経営者に渡し、その残った分から食料や利子も引かれていく状況では、どんなに働いても、前借金を減らしていくことさえ難しかった。

³⁸ 「二股大根と大黒さま」『図説性の神々』より

³⁹ 平成26(2014)年11月22日 元小郡市在住S氏(80代、現久留米市在住)への聞き取り調査より

ちなみに、福寿楼の『日記帳』に残された21人の記録のうち、前借金を完済させた娼妓は一人もいなかった。

このように娼妓たちの金銭をめぐる現実是非常に厳しかった。軍都としてのあゆみとともに桜町遊廓自体は栄えていったが、そこで実際に働く娼妓の生活は、とても苦しいものであった。

(2) 桜町遊廓の中の神社

最盛期に約250名もの娼妓を抱えていたとされる桜町遊廓は、軍人をはじめたくさんの遊客で賑わっていたとされる。そんな桜町遊廓の内部はどのようになっていたのだろうか。『九州都市久留米市案内図：住宅附記』⁴⁰という昭和8（1933）年に出版された久留米の地図がある。それには原古賀町の桜町遊廓の様子も記されている。桜町遊廓内の様子、妓楼がどのように並んでいるのか、といったような詳細を知ることができる貴重な資料である。

この地図（図5参照）を見てみると、22軒の妓楼を確認できる。敷地は、吉原のようにお歯黒どぶで囲われてはいないが、まちの一角に妓楼が集められ、一カ所に固められていることがわかる。ちなみに、地図上には記されていないが、遊廓への入り口には、大門が設置されていたという⁴¹。

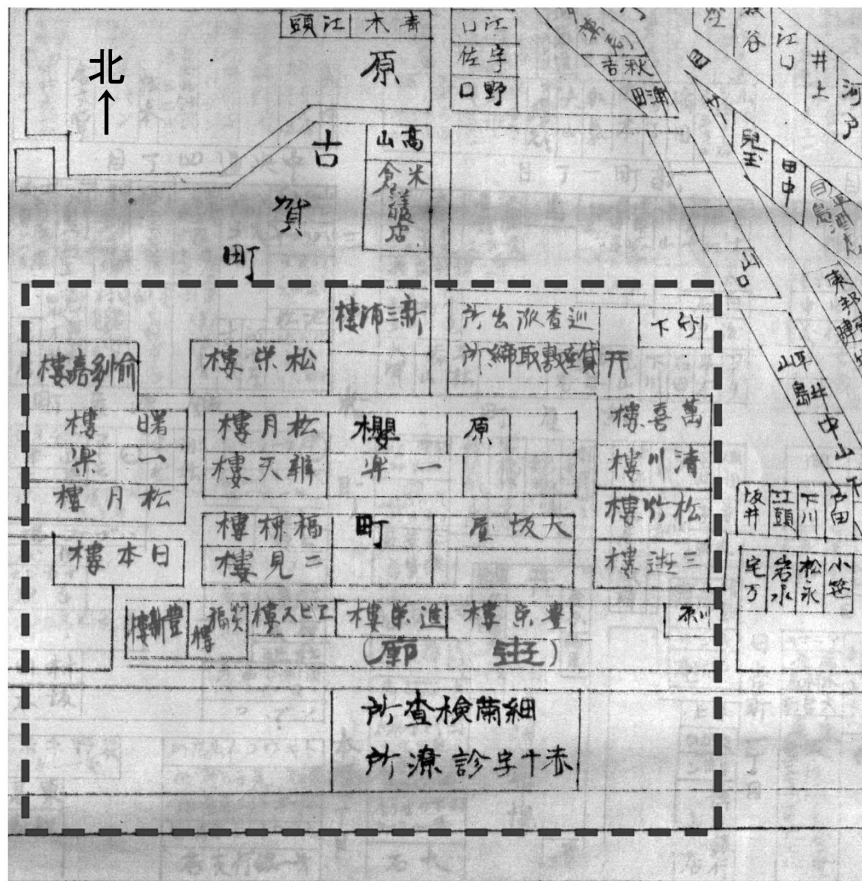


図5. 昭和8（1933）年時の桜町遊廓の様子（『九州都市久留米市案内図：住宅附記』より）
※点線内が遊廓敷地を表す。

⁴⁰ 長友廣次『九州都市久留米市案内図：住宅附記』（廣洋舎、1933年）

⁴¹ 2015（平成27）年3月14日 久留米市諏訪野町在住 M氏（80代）への聞き取り調査より。大門のあった正確な場所については分かっていない。

遊廓内には、妓楼のほか、巡查派出所、貸座敷取締所、そして遊廓の南側には、細菌検査所、赤十字診療所の建物が見える。巡查派出所は遊廓周辺の治安を維持するために配置された巡查の詰所である。貸座敷取締所は、遊廓の自治・運営を行う組合組織の事務所、また細菌検査所は、娼妓たちの性病検査を行っていた場所だと思われる。娼妓たちはこういった施設を含んだ遊廓内で、毎日の暮らしを営んでいたのである。

ところで、ここで注目したいのは、貸座敷取締所の東側に記された神社の地図記号である。『久留米市史』⁴²をはじめ遊廓についての記述があるどの書籍にも、遊廓内の神社について触れている箇所はなかった。しかしこの地図をみると、遊廓内に神社があったということがわかる。また、聞き取り調査の中でも、「大門から入って、遊廓の内部に神社があった」という証言も聞くことができた⁴³。このことから遊廓内に何らかの神社があったことは間違いのないと思われるが、その神社の名称をはじめ詳細はわからない。ただ、たしかに遊廓設置とともに遊廓内に神社が存在し、遊廓で働く人々の営みを見守っていたということは言えるだろう。

(3) 久留米市の娼妓が通ったとされる社寺についての伝承

明治期の福岡日日新聞に以下のような記事がある。

「久留米市原古賀町貸座敷菱屋の抱娼妓小若事本名□（18）は客月27日正午頃全市芋扱川町稲荷神社へ参詣として区域外へ外出したるかどを以て去2日久留米警察署に於て娼妓取締規則違反の廉を以て拘留3日に処せられたり。」⁴⁴

「久留米市原古賀町貸座敷城郭楼の抱娼妓、□、□、□、□の4名は、去る31日午後4時頃稲荷社へ参詣するとて無届外出なしたるを巡查に見現はされ去1日久留米警察署にて何れも科料金50銭に処せられたり。」⁴⁵

ここから、桜町遊廓の娼妓たちが、稲荷神社へ参詣に出かけていることがわかる。そして、区域外に出て処罰されていることから、先に紹介した遊廓内にあった神社ではないことがわかる。ちなみに、娼妓たちは、「娼妓規則」によって、無断で区域外に外出することは禁じられており、外出するには、一定の手続きが必要であったとされる⁴⁶。

それでも、桜町遊廓の娼妓たちは、遊廓外の神社に参詣に出かけていたのである。実際、久留米市内のいくつかの社寺に、娼妓をはじめとする花柳界で働く女性たちが参詣していたとされる伝承がいくつか残っている⁴⁷。以下、いくつかの事例を紹介したい。

1) 粟島神社（久留米市日吉町）

淡島大明神は、和歌山県和歌山市にある淡島神社を総本社とする祭神で、全国に淡島神社や粟島神社など、淡島神を祀った神社が多く存在しているとはさきに述べたが、久留米市新町（現・日吉町）にも粟島

⁴² 久留米市史編さん委員会『久留米市史』（久留米市）

⁴³ 2015（平成27）年3月14日 久留米市諏訪野町在住 M 氏（80代）への聞き取り調査より。

⁴⁴ 『福岡日日新聞』（明治31（1898）年3月4日付）※□部分は個人名のため伏せた。

⁴⁵ 『福岡日日新聞』（明治31（1898）年4月7日付）※□部分は個人名のため伏せた。

⁴⁶ 「娼妓規則」第5条より「自宅ヨリ出稼ギシ、又ハ貸座敷ヘ同居スルモ勝手タルヘシト雖トモ、貸座敷免許ノ区域外ノ地ヘ住居致シ、或ハ猥リニ区域外ニ徘徊候義不相成事 但不得止外出致シ候節ハ附添人同道可致事」

⁴⁷ 事例が少ないので、同じ花柳界で働いていた人々という視点から、娼妓だけでなく芸妓にまつわる伝承も含めることとする。

神社⁴⁸が存在していた。元和8（1622）年、初代藩主有馬豊氏によって建立されたとされており、大祭なども行われ、多くの参拝者で賑わったとされる。

この粟島神社は、主に性病治癒のご利益があるとされ、参拝し、病気が平癒した場合は、女性の腰下が描かれた絵馬を奉納する風習が有名であった。そのため、特に花柳界からの参拝者が多かったとされている。粟島神社が存在している日吉町は、桜町遊廓のあった原古賀町と比較的近い距離にあるので、桜町遊廓の娼妓たちも通っていたのではないかと考えられる。その一方で、毎年12月8日には、夕刻から、豆腐に折れた針を刺したものを奉納し、裁縫の上達を祈願する「針供養」の行事も行われた。このように粟島神社は、性病治癒のご利益だけでなく、家事の上達を祈願する場所でもあったことから、あらゆる立場の女性が参詣していたことがわかる。

粟島神社は、昭和20（1945）年8月11日の久留米空襲によって焼失し、現在は、小さな社殿に建て替えられている（図6参照）。絵馬奉納や針供養などの風習も残されていない。



図6. 粟島神社（久留米市日吉町）戦災から焼け残った鳥居の足には「新町三丁目有志」の文字が刻まれている。奥に見えるのが新しく建てられた社殿。平成28（2017）年1月8日筆者撮影。

2) 恵比須石像（久留米市城南町、祇園（素盞鳴）神社）

恵比須像は、狩衣姿に右手に釣り竿を持ち、左手に鯛を抱える像形でよく知られている。漁をもたらす漁業の神、また市場の守護神、商業神として信仰され、室町時代に七福神信仰が広まると、福神としても親しまれるようになった。久留米市にもたくさんの恵比須像が存在しているが、久留米市を含む筑後地方は、恵比須信仰のメッカであったと言われていた⁴⁹。昔から久留米商人の信仰を集めてきたとされる⁵⁰ことから、商売繁昌の神としての認識が強かったのではないと思われる。

⁴⁸「淡島」を「粟島」と表記する場合も多い。福岡県内には「淡島神社」「粟島神社」両方が存在し、その数は約62社にも及ぶ。

⁴⁹『久留米市史』第5巻、p327

⁵⁰ 同上



図7. 恵比須石像（久留米市城南町）平成29（2017）年1月8日筆者撮影。

篠山町（現・城南町）の祇園神社（素盞鳴神社）の境内に鎮座している恵比須石像（天保7（1836）年建立）には、戦前、花柳界で働く女性たちによって参詣されたことが言われている（図7参照）。おそらく、商売繁昌のご利益を求めての参詣だったと思われる。

3) 汗かき不動（久留米市中央町、妙泉寺）

久留米市米屋町（現・中央町）の妙泉寺に、石の不動像があった。一心に願いをかけると、不動像の体がじわじわと濡れて、汗をかいたようになるという言い伝えがあった。「汗かき不動」と呼ばれ、多くの人々の参詣を集めた。新町券番や紺町券番の芸妓たちがよくお参りしていたとされている。

（4）まとめ

桜町遊廓内にも神社が存在していた。その神社は、貸座敷事務所に隣接するかたちで立地していることから、主に、経営者たちによって祀られていたのではないかと考えられる。経営者たちの信仰を集めていたとすれば、商売繁昌にご利益のある神社であったのではないだろうか。

これに対し、実際に桜町遊廓の娼妓が参詣していたという記録や伝承が残っている社寺は、遊廓外の場所にあるものであった。娼妓たちは、わざわざ外出の手続きをとってまでも、また、ときには決まりを犯してまでも、遊廓外の社寺に信仰を求めたということがわかる。そこまでして彼女たちは何を願ったのか。伝承を参考してみると、娼妓をはじめとする花柳界で働く女性たちが参詣した場所および対象として挙げられる粟島神社や祇園神社の恵比須像の主なご利益も、性病治癒や商売繁昌であった。つまり、久留米市においても、これまで見てきた他地域と同様、娼妓たちが抱えていたのは、仕事を円滑にすすめる上での願いであったということが言えるのではないだろうか。

4. むすびにかえて

本稿では、遊廓および娼妓たちに関係する社寺、信仰にまつわる伝承等についてみてきた。娼妓たちの信仰の対象は、稲荷神社をはじめ、金精神、淡島神社など、様々であることがわかったが、それらのご利益が、商売繁昌または性病治癒を主にするものであること、淡島神社については女性を守る神であることなどから、まさに、娼妓の仕事に密着したものであること、そこから見えてくるのは、仕事を円滑にすすめていくことを望む娼妓の願いではないだろうか。しかしそれはどこか「表向き」の願いのようにも受け取れる。もっとも、例えば、大阪の天王寺における娼妓たちによる愛染堂に名前入りの献灯を行うといった行為に見られるように、自分たちの仕事に誇りを持っていた娼妓もいた。しかしながら、娼妓としてでなく、一人の女性として何かに願いをかけるとしたら、商売繁昌や性病治癒以外のご利益を求めたのではないだろうかとも考えられる。

本稿は、娼妓たちの祈りの内容を知ることによって娼妓の生活を浮き彫りにしようという試みであったが、社寺のご利益や信仰の伝承をなぞるだけでは、考察を十分にすすめることはできなかった。そこで、今後はもう一歩すすんで、社寺や信仰対象に対する娼妓たちの参詣方法および信仰との関わり方に目を向けてみることにしたい。

例えば、『春色梅美婦禰』に描かれたような、娼妓が社寺に一人でひっそりと参詣する姿、大阪の松島遊廓の娼妓や岡山の中島遊廓の娼妓にみられる自分たちで講をつくっての寺への参詣の例、また天王寺の娼妓による愛染堂に名前入りの献灯をする様子などからは、そこに娼妓たち自らの意志を感じることができる。その一方で、山形の熊野神社のお祭りにおいては、娼妓たちが巨大な男根奉納物を担いで練り歩いていたとされるが、そこに娼妓たちの自らの意志があったのかはわからない。「娼妓と男根奉納物」の組み合わせは意図的で、娼妓たちの意志というよりも、他者によるお祭りに興を添える狙いを感じさせる。

このように、参詣方法や信仰とのかかわり方に目を向けてみると、娼妓の祈りをめぐっては、娼妓の意志によるもの、あるいは、何らかの他者の意図がかかわっているものがあるということがわかる。その部分を見極めることによって、娼妓たちがどれほど切実に信仰と向き合っていたのか、あるいはただの習慣の一部になっていたのか、といったようなことが見えてくるのではないかと考える。そういった視座からも、新たに娼妓の生活を浮き彫りにすることができるのではないだろうか。

今後も、日本各地の遊廓および娼妓たちに関係する社寺、信仰にまつわる伝承を収集し分析を行うとともに、娼妓の参詣方法や信仰とのかかわり方についても注目しながら、娼妓と信仰、つまりは、娼妓たちがどのような思いでどのような内容のことを祈っていたのかということテーマに考察を深めていきたい。そして引き続き、久留米市桜町遊廓における娼妓たちの生活を浮かび上がらせることを研究の目的としていきたい。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり多くの方のお力添えをいただいた。研究に示唆を与えてくださった園井正隆氏（元久留米市民文化財保護課長）、貴重な資料をご教示くださった齋藤一郎氏（目黒区総務部人権政策課男女平等・共同参画センター 係長）、そして久留米市の民俗について多くの知識をご教示くださった坂田健一氏（元久留米市文化財専門委員）、また聞き取り調査にご協力くださったすべての方々に、ここに謝意を表したい。また本研究の一部は西南学院大学大学院国際文化研究科「先進研究奨励」事業によった。

参考文献

- 浅野明「奥州南部の金勢様」『あしなか 144号』（1974年）
岡山県性信仰集成編集委員会編『岡山県性信仰集成』（岡山民俗学会、1964年）
倉石忠彦『道祖神と性器形態神』（岩田書院、2013年）
久留米市史編さん委員会『久留米市史』第5巻（久留米市、1986年）
佐藤要人『川柳吉原風俗絵図』（至文堂、1973年）
菅原千華『淡島信仰に介在する宗教者—福岡県内を中心に足跡をたどる—』（「研究報告」編集委員会編『旅の文化研究所研究報告』（旅の文化研究所、2002年））
西岡秀雄『図説性の神々』（実業之日本社、1961年）
日比恆明『玉の井 色街の社会と暮らし』（自由国民社、2010年）
増田公寧「青森県における生殖器崇拜資料」『青森県立郷土館研究紀要 第36号』（2012年3月）
三谷一馬『江戸吉原図聚』（中央公論社、1992年）

参考資料

- 『娼妓所得金日記帳』（久留米市教育委員会所蔵、大正初期～昭和初期）
『福岡日日新聞』（福岡日日新聞社）
長友廣次『九州都市久留米市案内図：住宅附記』（廣洋舎、1933年）

参考サイト

- 天王寺愛染堂ホームページ www.aizendo.com
吉原神社ホームページ yoshiwarajinja.tokyo-jinjacho.or.jp/syokai00.html